



やさしい日本語

非常口をあらわしているピクトグラム⇒

土足厳禁。これを日本語があまりわからない外国人にわかりやすく伝えようと思うと何と伝えればいいでしょうか。避難所。これならどう伝えればいいでしょうか。ピクトグラムではどう表現されているのでしょうか…



先日、掛合交流センターで開催された「災害時外国人サポーター」養成研修に参加しました。災害が起きると、スマホを持っていないことが多いとき技能実習生をはじめ外国人住民の方は情報が届かなかったり、届いていても「難しい日本語」で意味がわからなかつたりして困ることがあるそうです。このため、災害時外国人サポーターが避難所等に出向いて、情報を「やさしい日本語」にしたり、外国語に翻訳したり、困っていることを聞き取ったりされています。

災害時のボランティア(被災者支援)には、がれき撤去などニーズに応じた国籍を問わない支援と、言語等を支援する外国人支援とがあると今回の研修で認識しました。私たちは、ストック情報とフロー情報で、災害時の適切な行動判断につなげます。ストック情報とは、今まで得た知識や経験に加え訓練などで蓄積された情報です。フロー情報とは、災害時の危険情報やそれに伴う避難などの対応情報です。この両方の情報を使って、少しでも適切な行動につなげようとしています。それでもバイアスがかかってしまうことがあります。バイアスとは、例えば災害が生じ危険が身に迫っている状況下において、多くの人は何となく「自分は助かるだろう」と思ってしまうような先入観のことです。外国では避難訓練を日本のようにしない国もあるし、訓練を受けていても日本の災害に対応した訓練を受けていないこともあります。それに加えフロー情報がわからないと災害時の不安はとてつもなく大きくなります。

本研修は、日本語以外の言語が話せなくもよいとされていたので参加しました。その意味が研修を通じてわかりました。災害時、外国人にとっての3つの大きな壁がより高くなります。言葉の壁、こころの壁、制度の壁の3つです。外国人の母国語でなくても、やさしい日本語で伝えようとするのが、つまり言葉の壁を低くしようとするのが気遣いにつながり、こころの壁を低くすることになるとわかりました。研修で、避難所に外国人が避難していると仮定した模擬演習がありました。現在雲南市に来ておられる技能実習生の方に、困っていることを聞き取るものでした。講師の方からは、なによりも安心を届けてくださいと言われました。しかし、実際は質問攻めにしただけでした。「名前は何ですか?」「どこの国から来ましたか?」「避難所生活で困っていることはありますか?」…。まず自己紹介をすること。立っていたら椅子等に誘導して座ってもらうこと。やさしい日本語で話すこと。…いろんな気遣いに欠けていたことにあとで気づかされました。質問の内容がよくわからず不安そうな目をされていたことが印象に残った演習でした。

20年以上前に韓国旅行に行った時のこと。ホテルの近くで百貨店の倒壊事故がありました。町は騒然とし、テレビも報道一色になりましたが、流れる映像には更地にがれきあるようにしか見えず、韓国語もわからないから何が起きているかわからず不安になったことを覚えています。当然日本でも報道され、日本から安否確認の連絡があっはじめて事の重大さを知りました。これが地震などで被災者となって海外にいたら、不安は相当のものだったと思います。

今回の校長室だよりでは、少し文字を大きくし、読みやすくすることに少し気持ちを置いてみました。ほんの少しの気遣い、善行…できること、気づいていないことはまだまだ多そうです。